

就労集団における喫煙状況の変化が耐糖能障害に及ぼす影響

著者	三宅(東) さおり
発行年	2018-03-09
URL	http://hdl.handle.net/10422/00012397

氏 名	三宅(東) さおり
学位の種類	修士(看護学)
学位記番号	修士第231号
学位授与の要件	学位規則第3条第1項
学位授与年月日	平成30年 3月 9日
学位論文題目	就労集団における喫煙状況の変化が耐糖能障害に及ぼす影響
審査委員	主査 教授 河村 奈美子 副査 教授 遠藤 善裕 副査 講師 坂東 春美

論文内容要旨

※整理番号	236	(ふりがな) 氏名	みやけ さおり 三宅 さおり
修士論文題目	就労集団における喫煙状況の変化が耐糖能障害に及ぼす影響		
<p>【研究の目的】 日本人の就労集団において、喫煙状況および喫煙状況の変化が耐糖能障害発症に与える影響(分析1)、喫煙状況および喫煙状況の変化が糖尿病発症に与える影響(分析2)を明らかにする。</p> <p>【方法】 調査協力企業の健康保険組合より提供を受けた定期健康診断の匿名化データを縦断的に結合してデータセットを作成した。耐糖能障害発症を評価し得る者4,038名を分析1、糖尿病発症を評価し得る者4,371名を分析2の対象者とした。喫煙状況を単年評価、経年評価に分けて性別に分析1と分析2を検討した。本研究は本学倫理委員会の審査を経て学長の承認のもとに実施した。</p> <p>【結果】 分析1の男性の単年評価では喫煙者は非喫煙者に比べて耐糖能障害発症リスクが約1.5倍であったが、禁煙者でのリスク上昇は認めなかった。一方、経年評価では喫煙者は約1.5倍、禁煙開始者も約2倍の耐糖能障害発症リスクであること、禁煙継続者は耐糖能障害発症リスクを認めなかった。これは結果指標を糖尿病発症とした分析2でも同様であり(単年評価)、経年評価では喫煙者で約2倍の糖尿病発症リスクを認めた。女性では単年評価、経年評価ともに耐糖能障害発症および糖尿病発症への影響を認めなかった。</p> <p>【考察】 単年評価と経年評価にて耐糖能障害発症への影響が異なった点について、喫煙状況を過大評価していた可能性が考えられるため、禁煙開始者などの定義は単年ではなく経年的に評価することが必要であると考え。糖尿病発症への影響について、本研究の対象者は先行研究の対象集団と比較して10歳以上若年であったこと、飲酒習慣の違い、禁煙後の体重増加量などが糖尿病の発現そのものに影響した可能性が考えられる。しかし、先行研究の報告から、禁煙により糖尿病発症リスクが上昇する可能性についても念頭においておく必要があると考える。禁煙開始者は、禁煙により耐糖能障害発症リスクを認めるだけでなく、糖尿病発症リスクについても上昇傾向にあるハイリスク集団として認識することで包括的な介入に繋がり得ると考える。</p> <p>【総括】 禁煙開始者の耐糖能障害発症への影響が示されたことにより、産業保健での糖尿病対策を広義的に考える上でハイリスク集団抽出や介入方法への示唆、禁煙推進のみに着眼する事への警鐘を提供し得たと考える。今後は、本研究では明らかにできなかった喫煙状況の変化と耐糖能障害発症・糖尿病発症との関連について中長期的かつ詳細な検討を加えることで、本邦独自の長期的な禁煙支援方略の策定が期待される。</p>			

(備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1,200字程度)

2. ※印の欄には記入しないこと。